

平成29年度「小学校学力向上対策支援事業」及び「中学校学力向上対策支援事業」に係る

第1回学力向上支援教員等協議会

1 日時 平成29年5月9日(火) 13:00~16:20

2 会場 コンパルホール 3階 多目的ホール

3 開会行事

挨拶 大分県教育庁 義務教育課長 米持 武彦

○県民フォーラムでの中学生は、地域の人々の心の空洞化といわれる中で、「自分たちはこの町に誇りを持ちたい」と語った。自分たちの状況をインプットした上で根拠を持って語った。これは日々考え、それを述べる機会があるから。学力がそのために使われている。

○新大分スタンダードは、平成22年から取り組まれている。当時は子どもたちの力を発揮させることができていなかった。授業改善が進み小学校は向上しつつあるが中学校はまだ道半ばである。中学校は主体的な学びへの転換を、そうすれば大山の中学生のような姿へとつながる。

○習熟の度合いに応じた指導、具体的な評価規準の設定が求められる。4つの観点をバランスよく考えて設定して欲しい。単元計画をしっかりと考えておかなければできないことである。

○学習指導要領の改訂について、今後周知はしていくが、それ以前にしっかりと読むことが必要である。ホームページ等で読むことはできる。



4 行政説明

「平成29年度学力向上対策関連事業体系」

大分県教育庁 義務教育課学力向上支援班 指導主事 大渡 克教

○大分県の学力の現状

小学校は全体的に全国平均と同等、国語のローマ字・漢字の読み書き、算数Bには課題がある。中学校はすべての教科が全国平均に届いていない。授業改善が必要である。人的支援として「学力向上支援教員」「習熟度別指導推進教員」を配置している。授業改善に大きく寄与しており、今後の期待も大きい。平成28年度の全国調査の質問紙で話し合いや発表の学習活動に関する項目は肯定的な回答が増えている。

○学力向上支援教員及び習熟度別指導推進教員のミッション

- ・新大分スタンダードに基づく校内、域内の授業改善の推進
- ・公開授業を年間3回以上実施
- ・実践報告等の情報提供
- ・協議会等への出席
- ・単元プランの公開（参考例は義務教育課のHP）

○学力向上関係協議会と授業改善の取組状況調査結果の参照を。



学年	調査項目	調査結果	調査結果	調査結果	調査結果	調査結果	調査結果		
1年	国語	30人	23人	15人	2人	1人	0人	1人	7人
2年	国語	30人	23人	15人	2人	1人	0人	1人	7人
3年	国語	30人	23人	15人	2人	1人	0人	1人	7人
4年	国語	30人	23人	15人	2人	1人	0人	1人	7人
5年	国語	30人	23人	15人	2人	1人	0人	1人	7人
6年	国語	30人	23人	15人	2人	1人	0人	1人	7人
7年	国語	30人	23人	15人	2人	1人	0人	1人	7人
8年	国語	30人	23人	15人	2人	1人	0人	1人	7人
9年	国語	30人	23人	15人	2人	1人	0人	1人	7人
10年	国語	30人	23人	15人	2人	1人	0人	1人	7人
11年	国語	30人	23人	15人	2人	1人	0人	1人	7人
12年	国語	30人	23人	15人	2人	1人	0人	1人	7人

5 発表

「豊後大野市教育委員会の取組」

豊後大野市教育委員会学校教育課 指導主事 中城 美加 氏

- 「ジオパーク」が「ふるさと学習」の教材となり、探究的な学習を「総合的な学習」で行う。
- 学力の状況は小中とも全国との差は縮まっている。授業・課題の質の向上、「まとめ」や「振り返り」の工夫、目的を持った対話（協働的な学び）思考の場（深く考える場）の設定、単元構想に取り組んでいる。
- 教育TRY運動
平成27年度より全地域（中学校区）に設置、「目標協働達成型」による地域とともにある学校づくりを推進する。連携型小・中一貫校として9年間を見通した学びの確立を目指し乗り入れ授業・児童生徒の交流に取り組んでいる。
- 乗り入れ授業
 - ・小学校における中学校教諭の乗り入れ授業を行っている。通年で中学校教諭がT1、単元により小学校教諭とのT1、T2の交替もある。カリキュラム・マネジメントを意識し、習得型か探究型か、T2の支援を導入・展開・終末のどこに位置づけ等を考えた授業づくりを行っている。
 - ・中学校における小学校教諭の乗り入れ授業も行っている。時間割の工夫も行う。
- 豊後大野市学力向上組織の要となる学校TRY推進部会の構成員として、学力向上支援教員、習熟度別指導推進教員が入っている。
 - ・学力向上支援教員（小学校）は他校訪問で校内研究の指導支援、単元構想時の訪問支援、追加訪問での授業研等も取り組んでいる。
 - ・学力向上支援教員（中学校）は教科の壁を越えた校内研究、ブロック制の活用で「3つの提言」の実践に取り組んでいる。
- 実際に授業の中で、「付きたい力」の明確化、「過不足なく説明する力」を意識する中で低学年からの積み重ねと組織的な授業改善の必要性を感じている。
- 成果として、具体的なイメージを持つこと、授業後の研究会の議論の深まり、中学校の教科部会の充実があげられる。
- 課題として、更なる授業力の向上と公開授業への参加の難しさがある。
- 子どもたちが「わかった」を実感できる授業づくりをめざす。



学力向上支援教員としての取組

豊後大野市立三重第一小学校 教諭 阿南 吉浩 氏

- 学びから逃げない子ども、6年生をめざす。6年生がいい手本となる。低学年が6年生を見る。
- 授業の参観者、事後研の参加者が少ない。
だから、自分が出向いて授業をする。
- 子どもたちの声や目の輝き、「結論を言い合うのが楽しかった」「頭括型、尾括型の違いがわかった」「書けずに悔しかった」等がモチベーションにつながっている。
- すべての学校に年2回、単元構想と校内研究のときに訪問をする。追加訪問で授業研



究、訪問校での授業公開を行っている。

- 守（まねる）破（新しいものを取り入れる）離（自分のオリジナル）。
- 6年前佐藤先生の授業から学んだ。子どもたちが、伝え合う姿は衝撃的だった。筑波の先生の本を読み自分で取り入れた。
- なぜ国語を中心か、「自分と自分を取り巻く世界を読み解き、それを自分の言葉で表現し、他者に伝え、交流する力」と考え学級の課題を言葉で解決する子ども、学級を育てたいと考えたから。
- 学力向上支援教員として、文を最初から順番には読まない、学んだことが使えるように 具体例を示したり、ワークプリントで読み取ったりして考える。
- 同じ土俵で議論して結論を出す。「海のいのち」の学習から物語を作る。
- 目的を持って読む。グループで話し合い違いを見つける。「クエは登場人物か？」
子どもたちは、動かないことにも意思があると考えた。根拠がある。
- これからも自分で出て行く。1時間でできる教材を取り入れる。
- 昨年と違うもの、子どもたちの「わかった・うれしかった」を増やす。他の学校にも行き少しでも広がっていけばよい。

6 情報交換

【市町村教育委員会担当者】

平成29年度市町村学力向上アクションプランについて

【学力向上支援教員・習熟度別指導推進教員】

学力向上支援教員・習熟度別指導推進教員としての役割

【指導教諭】

指導教諭としての取組

(記録 日田教育事務所 小畑禎尚)